
恐怖の黒い水

レンタン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恐怖の黒い水

【Zコード】

Z7349V

【作者名】

レンタン

【あらすじ】

みなさんも学生時代に一度はその学校に関する怪談話を耳にしたことがあるだろう。だけどその大半は根も葉もない作り話で、妙に恐怖感ばかり煽るようなものばかり。そして誰かがいざ真相を解明してみると、大抵はいたずら好きの子が流した単なる噂か、あるいはくだらない仕掛けによる恐怖演出。おそらく、もう散々聞き飽きてているのかもしれない。

だけど今回の話は断じてそんな作り話ではない。これはこの高校で本当にあった出来事からできた呪い話。始まりはある女子高生が授

業と授業の間の10分休憩、トイレで目撃したことだつた。夏といえばやつぱりホラー、初挑戦だけど、私がみなさんを涼しくする身の毛もよだつような恐怖をお届けします。それでは、どうぞよろしくお願いします。

1、始まりは噂から（前書き）

白井香奈 16歳

この物語の主人公で県立水原高校の2年生。休憩時間にトイレで恐ろしい光景を目撃する。そのことを彼、青山知輝君に相談し二人はその真相を解明していくことになる。

青山知輝 17歳

主人公の同級生で同じ2年3組の男子。彼女の香奈とは4カ月前のバレンタインデーに本命チヨコをもらつて、そのときから付き合っている。彼女からトイレで目撲した恐怖体験を聞き、一緒に真相を解明していく。

1、始まりは噂から

思えば始まりはくだらない噂話からだった。そのときは少し氣に留めていただけだったけど、まさか本当にその通りのことが起るとは……。

（一年前の夏）

初夏の日差しが眩しいある日、昼休みに弁当を食べ終わった僕は教室で自分の席に座っている。休みが始まつて10分近く、窓から外を見るとそろそろ昼ご飯を食べ終わつてくることなのか、ちらほら運動場に人が出て来始めた。

（さてと、そろそろ僕も行こうかな）

そう思つて席を立ち上がろうとしたとき、教室の前の入り口から声が聞こえてくる。

「おーい！ ともきー！」

そつちを見ると呼んでいるのは友達の赤田数貴だ。彼とは入学当初から友達で、普段からよく一緒に話したり遊んだりしている。

「おうつー！」

手を挙げて呼び掛けに答え、席を離れて彼のほうに駆け寄る。「外に遊びに行こうぜー！」

「行くか」

一人は廊下を歩いて階段を下り、1階の靴箱に並んで歩いていく。

「あっ、お前さ、黒い水の噂、聞いたか？」

「黒い水？ なんだそれ？」

「あー、じゃあ、まだ聞いてないのか。今ちょっとした話題になつてんだよ、聞くか？」

「聞くよ」

黒い水、それを聞いただけでは始めどんな話か全く分からなかつた。だけどなぜかそのとき、妙な感覚が背中を走り、少し寒気がした。

今思えばそれは無意識に予感したのかもしれない、何か恐ろしいことがいつか起ると。

2、トイレの黒い水

「Jの前、彼女から聞いたんだけど。Jの学校のある女子トイレの水が真っ黒に染まることがあるらしいんだ」

彼は高校に入学してからまだ2カ月ちょっととしか経っていないのに、なんと同じクラスの女子と付き合っている。噂はその彼女から聞いたようだ。

「あつ、黒に？ 赤じゃなくてか？」

僕は始めてこの話にこうこう疑問を持った。女子トイレという場所から直感的に怪談話だと気付いた僕は、それが普通なら血の色を連想させる赤ではなかつたから。

「ああ、それは俺も不思議に思つたんだ。でもどうも黒らしいんだ」

「へえー、そうなのか」

「うん。なんでもさ、昔この学校の女子トイレで髪を黒に染めていた女子生徒の呪いなんだよ」

「なるほど、だから黒か。ん？ でもなんで髪なんか染めるんだ？」

第一校則で禁止されないか？ 毛染めは？」

「そりなんだよな。それにここ最近は誰も見ていないらしいし

「じゃあ、单なる誰かの作り話じゃないか？」

「そりでもないらしい。どうも彼女が言つには、その黒い水を見たものは呪われるらしいんだ」

「呪われる？」

「そうだ。そして黒い水を見た次の日から酷いいじめを受けて、最後には耐え切れず自殺することになるんだよ」

「まじか。でもそれも作り話じゃ……」

「違うらしいぜ。何しろ本当にあつたらしいからな、10年前に。黒い水を見たある女子学生が酷いいじめを受けて、その後北校舎の屋上から飛び降りて自殺した話が」

「おー！ おー！ ちょっと待て！ それってまさか……」

「そうだ、あの血痕だよ」

僕はその話を聞いたとき本当に驚いた。実はこの学校には誰も近づこうとしない場所があるって、そこが北校舎北側の真ん中の下のコンクリートのひび割れ。その隙間には未だに流れ落ちずに赤黒い血痕が残っていた。

3、恐怖の序章

「そうか、それで。やつぱり単なる血痕じゃなかつたんだな」「だな」

「ん？ でも待てよ、つてことはその自殺つて10年も前の話つてことだよな」

「そうだな」

「じゃあ、なんで流れてないんだ？ 血痕？」

「セ二だよ。だから呪いだつて言われてんだよ」

「そういうことか。なんか嫌な話だな」

「ああ」

ここで一人は1階の靴箱にたどり着き、靴に履き替えた。

「それで、話は終わりか？」

「まあ、あまり気にすんなよ。噂は噂なんだからよ」

「そうだな。そうするよ」

そのまま一人は外に出ると、運動場へ走つて行つた。

（現在へ）

今思つとそのときは話を聞いただけで、少しだけ氣に留めてはいたけど、そんな重要なことだとは思つていなかつた。だけど現実は違つた。6月2日の木曜日の今日、去年あの噂話を聞いてからほゞ1年後、目の前にいる彼女が口にしたのだ。

「ねえ、聞いて、ともくん、聞いて。私、見ちゃつたんだよー。黒い水を！ 助けて！ お願い！ 私を助けて！！」

僕は思わず耳を疑つた。本当にそんなことが起つるとは全く想像してなかつたから。しかしその彼女の言葉は、恐怖に満ちた話のほんの序章にすぎなかつた。

4、目撃したこと

「おいつ！ それホントか？ かな！」

「ホントだよ、ホント」

彼女の目を見開いてあまりにも真剣な表情、どうやら嘘ではないようだ。

「分かった。聞いてやるから落ち着いて話してみろよ」

「うん」

すると彼女は1回大きく深呼吸して落ち着きを取り戻し、目撃したこと話を始めた。

（回想シーン）

6月2日の木曜日の昼、4時間目が終わって教室で友達と一緒に弁当を食べ終わった私は、一人で教室を出て4階の廊下の東側、階段の手前にある女子トイレに入つて行く。去年のこの時期に噂になつた黒い水の恐怖、ちょっと覚えてはいたけどどこのトイレで起つたかまでは知らなかつたし、怖いからといってトイレを我慢するわけにもいかないし、あえて気にしないようにした。

しかしこつもように個室に入り、おしつこを済ませて便座から立ち上がり水を流した。始めは普通に汚れのない透明な水だつた。だけど流れでから2秒ほどしてみるとうちに水は黒く染まり、流れていき便器には黒い水が溜まつた。

「うつ、うそ」

少し小さな声でそれだけ呟いたけど、それ以上は恐怖で全く言葉にならなかつた。それから私は逃げ去るように急いで洗面所に向かい蛇口をひねると……、そこから出たのもまた黒い水だつた。

5、彼の反応

それを見た私は急いで蛇口をひねって水を止めて、結局手も洗わずにトイレを出てしまった。

「どう思つ? もくん」

「なあ、その前に一つ確認してもいいか?」

「何?」

「かな、手、洗つてないだろ」

「……うつ、うん」

図星だ、彼の言つとおり私はトイレを出た後も蛇口をひねるのが怖くてまだ手を洗つていない。

「汚いな、ちょっと来い」

「えつ」

そう言うと私は彼に左手をつかまれて少し強引に水道がある廊下の真ん中に連れて行かれる。そして右手で蛇口をひねり水を出してくられた。

「ほら、洗いな」

「うん、ありがと」

私は恐る恐る両手を流れ出る水道水に差し出し、30秒ほど手を流し洗い、ハンカチを出して手を拭ぐ。

「さっきの話だけど、かな、本当に見たのか? 黒い水を?」

「ホントだよ、うそじゃないよ!」

「そうか。ちゃんと明るかつたか? トイレ?」

「うん。だつて電気ついてたし、今日、外晴れて、こんなに明るいし」

「なら、見たのは間違いなよ!」

どうやら彼は事実として受け止めてくれたようで、私は少しほっとして安心した。

6、確認

「じゃあ、信じてくれるんだよね、ともくん」

「ああ、見たことほな」

「えつ」

「見た」とは事実だろ、ただそれが本当に黒い水だったかどうかはな……」

どうやら彼は私が見たことは事実として認めてくれたようだが、黒い水そのものを信じてくれたわけではないようだ。

「やっぱり、信じてくれないの？」

「いや、そういう意味じゃない。いくつか確認したいことがあるんだ、黒い水が何だったのか。いいか？」

「うん」

「そうだな、まずは……、真っ黒だったか？」

「うん、真っ黒。墨みたいに」

「そうか。なら、サビとかではなさそうだな。髪の毛とかは落ちた？」

「うんうん、落ちてなかつたよ」

「かなの前に誰か入つてたか？」

「いや」

「なるほど。となると水道管や、誰かのイタズラではなさそうだな。まあ、でも一度タンクの中は確認しないとな」

「そつか。でも水道の水も黒かつたんだよ」

「それは錯覚の可能性もある」

「えつ、どうして？」

「残像つてことがあるだろ。恐怖感からそう見間違えたっていつも」

「そんなはずないよ。だって私！ 見たもん！」

「落ち着けよ、かな。まあ、どちらにせよ、タンクの中は確認しないとな」

「……えつ、もう一回入るの？ トイレ」

「当たり前だろ。だけど今日の放課後だな、昼間は僕が入るわけにはいかないから」

「いやだよ、私」

「そういうわけにはいかないだろ。かなが見たんだから。まあ、か
なが来ないならずっと怖いままだけどな」

「そんなん……」

「どうする？」

「……分かつた！ 行くよ、行けばいんでしょう！」

「なら決まりだな。時間は今日の放課後8時半、いいな」

「うん」

仕方がないので泣く泣く私は彼の要求に応じることになってしまった。

7、意見

昼休みに彼女から黒い水を目撃した話を聞いた、しかし彼女が僕以外にも黒い水の話をしているかどうかは分からぬが、誰か他の人にも話してみて意見を聞く必要がある。

彼女は女子テニス部、僕はサッカー部に所属しているのだが、さつそく放課後の練習の休憩時間、友達の赤田君に話してみた。

「かずきー、おつかれさま」

「おつかれー、やっぱ、夏の練習は暑いしきついな」

「うん。あのさ、ちょっと聞いて欲しい話があるんだけど……」

「いいけど、なんだ？」

「彼女が見たらしいんだよ、例の黒い水を」

「おい！ それ、マジか！」

「うん。まあ、まだ確認していないから本当かどうかは分からぬけど」

「見間違えってこともあるもんな」

「そうそう。でも心配だな、彼女いじめ受けないといいけど……」

「それはお前次第だろ」

「えっ」

「だつて恋人だろ。彼女のことはなんとしてでも守つてやらな」と

「そうだな。僕が守るしかないもんな」

「頑張れよ」

「うん、ありがとつ」

「あつ、そうだ！ 協力するよ、俺らも」

「いいのかー？」

信じがたいホラー話とはいえ僕も少なからず怖い気持ちはある。そのため彼の協力は僕にとって非常に心強かつた。

8、親友

私は今日、怖い気持ちを我慢してずっと学校にいるけど、正直不安でならない。本當なら彼以外にも田撃したことを相談したかったが、誰かにするとそれをきつかけにみんなに知られていじめを受けるのではないかといつ恐怖にかられていた。

しかしこのままでは流石に精神的に辛かつたので、彼と同じくくらい信頼できる親友で同じ女子テニス部の黄田愛里ちゃんに相談してみることにした。

「ねえ、えりちゃん」

さつそく私は放課後の部活動の練習、途中の10分休みに彼女に話しかける。

「何？ かなちゃん」

「ちょっと聞いて欲しい話があるんだけど、いいかな？」

「いいよ」

「ありがと。でも、こいじゅ……」

「場所変えよつか？」

「うん」

私が少し話しつくそうとした、それだけで察してくれたのか彼女は私の左手を握つて、みんながいるテニスコート周辺から、校舎内の1階の廊下誰もいない静かなところに連れてってくれた。

「私、分かるよ。かなちゃん、何か怖い思いしたんでしょ？ 手握つてあげるから、話してみて」

「ありがとう、ホントに」

こういうときの親友の配慮は本当に心強いもので、私は一呼吸置いて気持ちを落ち着かせて話を始めた。

9、4人の仲

「実はね、私見ちゃつたんだ、黒い水を
黒い水つて……、あのトイレの？」

「うん」

「ねえ、それってどこのトイレで？」

「南校舎4階の東側のトイレだよ」

「そつか。そこだつたんだ」

「知つてるよね、えりちゃんも黒い水の呪い」

「知つてるよ。いじめられて最後には自殺に追い込まれるつていう

「私、大丈夫かな？」

「大丈夫だよ。それにともくんがいるじゃない、かなには

「ただけど……」

「それも私たちもいるしね」

ここで彼女が私たちと言つたのは自分が付き合つている彼の赤田君
も入れてのことで、私と彼の青山君を合わせて4人はとても仲がよ
かつた。

「ありがとう。でもさ、我今日また行くことになっちゃつたの、そ
のトイレ」

「どうして？」

” ピピピッ、ピピピッ ”

そのとき彼女の問い掛けを遮つて高い携帯の着信音が鳴り響いた。

「あっ、ちょっと待つて」

「うん」

「彼からだ」

珍しく部活動中に来たメール、それは彼女の彼からだった。

10、4人一緒に

彼女は携帯を開いてついさっき来たメールを読んでいる。

「何だつて？」

「うん。同じだつたみたい」

「どういうこと？」

「かずきくんもちょうどともきくんから相談受けたみたいで、放課後一緒に調べに行かないかつてや」

「そうだつたんだ」

「よかつたね、かなちゃん。4人一緒に怖くないでしょ」

「うん。ありがとう」

私は親友の優しさを実感し、不安だつたけど大分気持ちが楽になつた気がした。

赤田君はポケットに隠し持つていた携帯を出して、彼女にメールを送つている。

「彼女、大丈夫なのか？ ホラーつて」

「大丈夫だよ。えりとこの前一緒にホラー映画見に行つたから」

「そつなんだ」

「しかもさ、それ彼女の誘いでさ、かなり怖い奴だつたよ。それに彼女平気な顔して見てたし」

「それはすごいな」

「だろ！」

“ピピピッ、ピピピッ”

すぐには彼の携帯の着信音が鳴り、返信が返ってきた。

「そうか。なんか同じだつたみたいだぜ。えりもかながら相談受けたところだつてよ」

「そつか

「じゃあ、決まりだな。部活終わつたら4人で行こうぜ」

「そうだな」

このあと彼が彼女に集合場所、時間などの確認のメールを送り、人一緒に調べに行くことが決まった。

4

11、待つていろとお

6月の中旬の1年で最も日が長い初夏の時期、部活動の練習が終わるのは遅く、今日もすでに8時をかなり回っている。私たち一人は練習着姿から制服に着替えて、待ち合わせ場所の南校舎4階の階段の廊下に来ていた。日没後、放課後の校舎は当然明かりなどあるはずもなく、ほぼ真っ暗で静まり返っている。その中を私たちは携帯の明かりで足元を照らし、恐る恐る階段を4階まで上がってきた。時間は8時20分過ぎで待ち合わせ時間の8時半になつておらず、彼二人はまだ姿を見かけない。

これから4人で一緒にあの恐ろしいトイレを調べるのだが、すでに正直今でも夜の学校というだけで非常に怖く、できることなら自分だけ家に帰ってしまいたい気分である。さらにまだ練習をしている部活があるのだろうか、たまに聞こえてくる声が風で木が鳴る音に混じつて余計に恐怖感演出していた。

「ねえ、えりちゃん」

「何？」

「怖くない？」

「ちょっとね。でも私、結構ホラー好きだから」

「そなんだ」

「うん。だからね、今ちょっとワクワクしてるんだ」

初めて知ったことだがどうやら彼女はホラーが好きなようだ、怖い話が専らダメな私とは正反対である。

私たちが来てから3分ほど経つたのだろうか、私の両肩に突然2つの手が乗つかつてきた。

12、怖がりな私

「 キヤーーー！」

私は驚きのあまり両手を振り上げて、大声を上げて叫んだ。
「 ばかっ！ 何すんだよ！」

「 えつ」

私は恐怖のあまり目を瞑つていたせいか、一瞬何が起きたのか全く分からず、どこからか分からず聞こえた声だけが返つて恐怖感を搔き立てる。

「 わあー！ キヤーーー！」

「 だから叫ぶなって言つてんだろ！」

今度はそう言われて無理矢理口を押さえられ、すると抵抗できなくなつた私は静かになる。

「 目を開けて、こらん、かな」

右横からえりちゃんの声が聞こえてくる。私は勇気を出して恐る恐る目を開けてみた。すると目の前には暗いけど、はっきりと赤田君の姿があつた。

「 はあつ」

私の口を押さえられていた手は離され、ため息が一つ漏れると落ち着きを取り戻し、そして後ろにいたのがともくんだと認識できた。

「 もうつ、驚かさないでよ」

「 ジめん、ジめん。しかしお前、ホントに怖がりだな」

「 仕方ないでしょ。それに見ちやつたんだから」

「 それもそうか」

「 おいつ、余計な話してないでさつあと調べよつぜ」

「 そうだな」

「 うん」

赤田君の声掛けにみんな同意し、4人は例のトイイレに向かつて廊下を歩き始めた。

13、開いていた訳

4人で夜の学校の暗い廊下を歩きトイレに向かう間、私は気になつていたことを彼に聞いてみた。

「ねえ、ともくん

「何?」

「どうして今日南校舎の入り口、鍵しまつてなかつたの?」

皆さんは彼女が持つたこの疑問、少し不思議に思うかもしれない。

普通高校といえば部活動や先生の残業などの関係で夜遅くまで鍵が開いていて、電気がついていることが多い。しかしこの高校は珍しくどんなに夜遅くまで練習している部活があつても、一年中夜8時前に全ての出入口の鍵を閉めてしまつ。つまりよっぽどのことがない限り、夜に学校に侵入することはできないということだ。ところが今日は私たちが南校舎の入り口に来たときにはもう8時20分前だったというのに鍵は開いていて簡単に中に入ることができたのだ。

「あー、僕ら開けといたんだよ」

「えつ、どうやって?」

「まさか窓割つたんじゃないんでしょうね」

「しねーよ、そんなこと。予め開けておいたんだよ、1階の窓の鍵を1つ」

「そういうことか。やるね」

「まあな」

「あれ? でも警備の人気が閉めちゃうんじゃないの?」

「大丈夫。それは早くても9時以降だから。それまでは閉められなつてわけ」

「そつか」

ここで4人は例の女子トイレの前に到着した。

「さてと、さつそく調べるか」

「えつ、ちょっと……」

「ぐずぐずしてる暇はないんだ。早くしないと警備の人気が来ちゃうからな」

「大丈夫だよ、かな。4人一緒にだから」

「……分かった」

仕方なく納得した私は、いよいよ4人は女子トイレの中に足を踏み入れた。

14、開かれるドア

4人がトイレに足を踏み入れる。彼がまず電気を付ける。するとさつきまでは暗くて恐怖感を搔き立てられるだけだった空間が照らされて明るくなる。だけど昼間日撃したことを思うと、踏み出す一歩一步が私にとって非常に重い。だけすごく赤田君の声が私たちの歩みを遮った。

「ちょっと待つた！」

「何？」

彼女のえりちゃんがすぐに反応する。

「誰か見張りをしたほうがいいんじゃないかな？」

「あっ、そつか

「それもそうだな」

確かに彼の言うとおりである。いくら警備の人人が巡回に来るのは9時以降とはいって、それまで誰も来ないという保証はどこにもない。「じゃあ、俺がやるよ。廊下で見張つておくから、3人で調べて」「ありがとう」

「分かった」

赤田君は一人廊下に出て見張りをして、私たち3人で調べることになった。

「どこのトイレだ、かな」

彼にそう聞かれて私は4つある個室のうちの入り口から2番目を指さした。

「いいか、よし」

そう言って彼は私が指したトイレのドアを開ける。ちなみにこの学校の女子トイレは入り口に近い2つがみんな洋式で、ドアは全部外開きなっている。
ドアが開けられて中が見えたとき、私は恐怖のあまり視線を逸らし直視できなかった。

1-5、トイレの中

恐怖のあまり泣える私をよそに彼とえりちゃんはたんたんと中を調べ始める。

「特に不審な点はないやつね」

「だな」

「ねえ、かな」

彼女が私の名前を呼ぶ。

「何?」

「怖がつてないで、かなも見たら?」

「えー! でも……」

私は彼女の問い掛けに首を振つて見るのを拒否する。
「しょうがないなあー。じゃあ、手を握つてやるから、うひひに来いよ」

そう言つて彼は私の手を握り、トイレに近づいて中を見る。
「わ、分かった」

さすがに元までされると私もいつまでもびびつてゐるわけにはいきかず、一歩一歩トイレに近づいて中を見る。

「どうだ? 何か気になることがあるか?」

「うんうん」

昼間も水を流すまで特に変わった様子はなく、今も見たと同じように思える。

「そりが。なら、水流してみるか

「そうね」

「えつ! そ、それはちょっと……」

「さすがにダメか

「う、うん」

「まあ、でも流さないわけにはいかないわね

「えつ! ょうっと! えりちゃん」

そう言って彼女は私が嫌がつて止めるのを振り切つて、水を流すレバーを回した。

16、流された水

私は水が流された瞬間顔を隠して、見ないようにしていた。耳はふさいでいなかつたので、“ジャー、ジャー”と水が吸い込まれていく音だけが頭で響いている。

「うーん、普通だな」

「そうね。変わらないわね」

「ほ、本当?」

どうやら一人によると水の色は変わっていないらしく大丈夫なようだ。

「うん。ほら、かなも見てみなよ」

「えっ」

「ほら、終わっちゃうから。かな、早く!」

そう言つて彼女が無理矢理私の顔を覆つている腕をつかんではなさせた。

「あっ、ちょ、ちょっと」

すると田の前に少し弱くはなつてているが、吸い込まれていく透明な水が写る。ここで今さら顔を隠してもしようがないので3人で一緒に最後まで見つめていた。

「かなが見ても変化なしか」

「変わらなかつたわね」

「そうだな。念のためもう一回

「やめてよー!」

さすがに一度も怖い思いをするなんて耐えられず、私は気持ちに任せて叫んだ。

「えっ!なら、仕方ないか。じゃあ、タンクの中だな」

「そうね。開けてみましょ」

もう一度水が流されるのはなんとか阻止できたが、今度はタンクの中を一人は調べるようだ。当然に見ることなんてできるはずもなく、

再度私は顔を両手で覆つた。

17、異変

「パツと見、特に何もなさそうね」「そうだな。水は透明だし、何かが取り付けられているわけでもないか」「これはかなの錯覚かもしけないわね」「それないとと思うけどな」「信じてるんだ、ともくん」「まあな。信じないわけにいかないしな」「それって彼女の言ったことだから」「いや、そうじゃない」「じゃあ、ちゃんとした理由があるってこと?」「もちろん」

ここでタンクのフタが戻された音が聞こえ、私が顔から両手を離したのと同時に彼が説明を始める。

「一番はその黒い水を目撃したのが昼間で、かつトイレの電気がちやんとついていたことだな。明るければそう簡単に見間違えるはずもないしな」「なるほどね。でもかながこのトイレの怪談話を意識していたとしたら」「それもそうか」「それはないよ。だつてこのトイレがその話の場所か、私知らなかつたもん。だから意識しないようにしてたし」「あつ、そうか。確かにこの話つて前にどこであつたかは明らかじゃないんだよな」「違うんじゃない? 本当は誰かが知つて恐怖を煽るためにそれを隠しているとか」「いや、それはない」

そう言つて彼女の意見を否定したのは、なんと廊下で見張つている

はずのかずき君だった。

1-8、恐怖のかくれんぼ

「おー、かずやー。見張ってるんじゃないなかつたのか?」
「そんな場合じゃない!」
「どうしたの?」
「つて、まさか」
「そのまさかだよ。足音が聞こえてきたんだが、廊下に影も見えた、警備の人を見回りに来たんだよ」
「まあ、早くここから出ないと」
「そうね。とりあえず今日は切り……」
「それは無理だ」
「どうこうことだ」
「挟み撃ちなんだよ、両方から」
「おいおい、マジかよ。参ったな」
「そんな、どうするの?」
「隠れるしかないわね」
「隠れるって、このトイレの中だけでか」
「仕方ないでしょ。ここしかないんだから」
「それはそうか」
「はあ、かずきがむつと早く見つけられれば、ここから出られたのに」
「無茶言つなよ、真っ暗なんだから」
「まあ、いいわ。早く隠れましょ!」
「そうだな」
「でもどこに隠れるのよ」
「さうね。私たちは身体が小さいから、洗面所の戸棚にしましちゃう。あそこは何も入っていないはずだから」
「うん」
「一人は和式トイレのドアの裏がいいんじゃない?」

「なるほど、死角になるな」

「確かに」

「あつ、足音が今……」

「もう、ここまで来てるな、急ぐぞ」

「うん」

トイレの中を調べている途中に迎えた最大のピンチ、4人は急いでそれぞの場所に身を隠した。

19、死角

4人は電気を消して急いでそれぞれの場所に隠れた。通常なら学校のトイレにはドアはなく、漏れ出た電気の光で誰かが中にいるのが分かつてしまう。しかし幸いなことにこの学校の女子トイレは防犯がしつかりしていて、入り口には窓のないドアがあり、光が漏れる可能性はかなり低かった。

「大丈夫かな、えりちゃん」

「しつ、静かに。声出したらダメよ」

「うん」

いよいよ足音が大きくなり一人の警備員がトイレに近づいてくる。4人は声を出さずに息をひそめてじっとしている。

トイレのドアが開いて電気が付けられ、一人の警備員の声が聞こえてくる。

「どうだ、お前、ここまで異常はなかつたか？」

「ありませんでした、先輩！」

「そうか」

「ここも異常はないみたいですね」

「そうみたいだが……、念のため調べるぞ」

「えつ、でも、ここ女子トイレですよ」

「何言つてんだ。生徒と職員はもう帰ってる、俺たちが入つても問題ねえよ」

「はあ」

本当なら入り口から見渡しだけで出て行ってくれれば、大助かりだったのだがどうやら中まで調べられるようだ。

「入るぞ！」

「はい」

二人は洗面所には目もくれず、奥に入つて行き個室を一つ一つ開けて調べ始める。かなりまずい状況だが4人がいる場所は完全に死角

になる、相手がかくれんぼの鬼でもない限り見つかるはずはなかつた。しばらくして二人が一通り調べ終わると……、

「おいつ、誰かいたか？」

「いません」

「なら、大丈夫だな。次、行くぞ！」

「はい」

こうして今日最大のピンチは上手く隠れられたおかげで難なく過ぎ去つていった。

20、脱出

警備の人人が出て行つて5分くらいは経つただろうか、おそらくもう近くにはいないだろうと考えられる。

「もう大丈夫よね」

「たぶん……」

「出ましょ」

「うん」

私たちが先に戸棚から出て電気を付けて、他の一人に声をかける。

「もう大丈夫よ、出てきて」

すると二人がトイレの個室の裏から出てきた。

「いやー、危なかつたな

「だな。入つてきたときはもうダメかと思つたぜ」

「死角があつて助かつたわね」

「そうだな」

「さてと、どうする? これから?」

「もう終わりでいいんじやないか? 調べ終わつたんだろ、一通り」

「うん。じゃあ、今日はもう帰るか

「はあつ、よかつた」

「そうね」

帰ることになつてとりあえず一安心である。4人は電気を消して、トイレから出て声を出さず息をひそめて静かに1階まで降り校舎から出る。時計の針はすでに夜の9時を回つており、門は閉まつているため金網を昇つて道路に出た。

「なんとか無事に出られたわね」

「そうだな」

「行こうぜ!」

「うん」

「おうひ」

ここから4人の帰り道は途中までは同じ、一緒に話しながら帰つていぐ。そこで私はさつき途中で話が終わり、聞けなくて気になつたことをかずきくんにきいてみた。

2.1、噂の始まり

4人並んで歩くと後ろから車が来たときに危ないので、私とともにくんは後ろを、彼女とかずき君は前を歩いている。

「ねえ、かずきくん」

私は前にいる彼の肩を叩いて呼び掛ける。

「なんだ？」

「1つ聞きたいことがあるんだけど……。」

「聞きたいこと？」

「うん。さつき、トイレにいたときには、かずき君が話に入ってきた「それはない」とて言ったよね」

「ああ、どこのトイレスか明らかじやないって話か

「そう、それ。なんですぐに否定できたの？」

「そのことか。実はな、あの噂、最初に知ったのは多分俺なんだ」「ちょっと待つて！ それホント！？」

「マジか」

「う、うそ！？」

私も驚いたが、二人も声を上げて驚いた。

「あれ？ 私が教えたんじゃなかつたけ

「いや、実はそれより前に知っていたんだ。緑川先生から聞いてな緑川先生というのは彼の担任の先生で、普段は私たちに化学を教えてくれている。年齢は見る限りでは35歳前後、赴任してもう10年になることを聞いたことがある。

「そうだったんだ」

「毎年思い出すらしいんだ、10年前に自殺したあの女子学生のことかな」

「そんな前からいたのか」

「でも私も先生から聞いたけど、去年の6月ぐらいに」

「俺はもう5月のときに聞いてたよ。まあ、えりから聞くまでは他

の奴には言わなかつたけどな。で、そのときにそのトイレの場所までは分からないつて言つてたよ

「だけどなんで思い出すんだ？」

「自分が初めてこの学校で受け持つたクラスの女の子だつたんだとよ。だから、なんで止めてあげられなかつたのかつて、今でも後悔しているらしんだ」

「なるほど。つてことは、いづれ先生にも話を聞かないといかな

な」

「そうね」

「うん」

「それなら、さつそく明日聞きにいかないか、放課後に。俺、今回

の話を聞いて確認しに行こうつて思つてたから」

「そうだな、そうするか

「うん」

こつじて4人は明日の放課後、噂を流したその人、緑川先生に話を聞きに行くことになつた。

22、先生の家で

噂ほど事実関係があやふやなものはない。多く人を介して伝わっていくうちに記憶の危うさで内容は変わっていくし、場合によってより魅力的な話になるよう誇張されたり、改変されることもざらにある。となると一番確実なのは、その噂を最初に流した本人に聞いて確認するしかない。最もその本人でさえも記憶が定かであるか、どこにも保証はないのだが……。

トイレを調べた次の日、私たち4人は部活が終わって放課後、緑川先生の家に呼ばれていた。ただ話を聞きに行くだけで大げさだと思うかもしれないが、学校の校舎が8時以降施錠されて入ることができず、部活が終わるのが8時以降である以上、先生の家で話を聞くことになるのは必然だった。さらに話を聞き終わつたあとは時間も遅くなり、夜道は危ないので親に事情を話して先生の家に泊めてもらうことになつている。

先生の御主人と小学生の兄妹の二人と一緒に8人で楽しく食卓を囲み、4人それでお風呂を済ませて話を聞ける状況になつたのは夜の11時過ぎ、他の3人が寝静まつたあとだった。

「ごめんね、遅くなつて」

「いえ、全然。今日は晩御飯まで、本当にありがとうございます」「ありがとうございます」

まずかずき君がお礼を言つて、同時にみんなで頭を下げる。

「いいのよ、気にしないで。久しぶりに大勢でご飯を食べて先生も楽しかったから。それよりも……、本題に入る前に一つ聞いていい？」

「はい」

「さつきお風呂、男女で一緒に入つたでしょ？」

「ええ、まあ」

「は、はい」

先ほどお風呂に入るときお湯がもつたいないから一人ずつ入ってと言われたのだが、考えもせず恋人同士で入ってしまった。

「先生もあなたたちが付き合っていることは知つてたけど、もう済ませてたのね、セックス」

「はい」

「まあ……」

「す、すみません」

他の3人が答えにくそうに返事する中、私はなぜか謝つてしまつた。
「いいのよ、別に謝らなくて。恋人同士なら当たり前のことだから。
でも、ちゃんと避妊してるのよね？」

「はい、大丈夫です」

「もちろん！」

「はい」

「なら、いいわ。それだけ確認しておきたかったから
「じゃあ、先生。そろそろ例の話、聞かせてもらつていいですか？」

「ええ。始めるわね」

そう言つて先生のほころんでいた顔が少し引き締まり、話が始まつた。

23、施錠される訳

「えつと、白井さんが見たのよね、黒い水を」「はい」

「ここからは緑川先生の話になります」

10年前、自殺する2週間前に先生に“先生、私、見ちゃったんです、黒い水を”そう言つてきたのもあなた同じ高校2年生だったわ。今でも先生後悔してる、なんで止められなかつたんだろうって。だけど、先生がそのとき彼女から聞いた話は本当に恐ろしいものだつた。

先生は当時、まだ赴任してきたばかりで、2年4組の担任を受けもつたの。その黒い水を見た彼女は桃山美奈つて名前でね、勉強はよくできて、どちらかといえば落ち着いた感じの子だったけど、欠席したことはなくて元気な子だったわ。で、その子が黒い水を見たと言つて先生のところに来たのは、7月も半ば、すっかり暑くなつていたわね。

白井さんは違つて見たのは南校舎3階の女子トイレ、時間は部活が終わつたあの夜8時20分ごろ、忘れ物を取りに教室に戻つてついでに寄つたときに田撃したそつよ。

「えつ、じゃあ、ちょっと待つてください、先生。今8時以降校舎に入れなくなるのつて……」

そつ。きっかけはその彼女が黒い水をトイレで田撃して、その後酷いいじめを受けて最後には北校舎の屋上から飛び降りて亡くなつた。そのことが原因だつたの。

8時以降も練習している部活も私の高校には決してある。それに校舎はなぜか8時には施錠されて、誰も入ることはできなくなる。外にも一応トイレは設置されているため特に問題はないのだが、ずっと不思議に思っていたことの謎が今解けた。

「そうだったんだ、知らなかつた」

「うん」

「それで、先生。彼女はトイレで何を見たんですか」「引き続き先生の話になります」

黒い水よ、多分白井さんが見たような。彼女がトイレに入ったのはさつきも言ったように夜の8時20分くらい、一番手前にある洋式の個室にね。用を足しているときは何も異常はなかつた。そして立ち上がつて水を流して、5秒ほど経つたくらい、ちゃんと流れたのを確認して外に出ようとしたとき、透明だつた水が一瞬にして真っ黒に染まつた。彼女も黒い水の噂は聞いたことがあつたみたいで、恐ろしくなつて急いでそこから立ち去ろうとした。だけど手だけは洗つて帰ろうと水道の蛇口の水をひねつた、そうしたら今度は黒い水が出てきた。

「あつ、同じだ、私と」

じゃあ、10年前と同じことが起つたのね。結局彼女は叫び声を上げて一日散に逃げ帰つたそよ。

25、病氣

「10年前の話はこんな感じね、何か質問はあるかしり?」

「はい、先生!」

「ここで先生に質問を真っ先に投げかけたのはともくんだった。」

「何? ともくん?」

「先生は黒い水の怪談話、その話のもとになつた出来事については知らないんですか?」

「ああ、そのことね。やっぱり知りたいよね?」

「はい」

「実は先生もみんな知ってる程度のことしか知らないのよ」

「そなんですか?」

「「めんね。そこまで遡るともう30年近くも前の話になつたりやうから」

「じゃあ、仕方ないですね」

「あつ、でも! 一つだけ話せることがあるかも。聞く?」

「はい、お願ひします」

「えつと、じゃあ、みんな黒い水のもの話がトイレで髪を黒く染めていた女子生徒の話ってことは知ってるのよね?」

「はい」

「だけど不思議に思わない? 染めるのはいいことしてなぜ黒かつて?

?」

「確かに……、言われてみれば」

「もしかして日本人じゃなかつたとか?」

「そう言つたのはえりちゃん、これは十分に有り得そうな話である。」

「そう思うでしょ。でも実は違うの。その子病気だったらしくの、生まれつき毛の色素が薄い」

「えつ、それなら事情を話せば問題ないんじや……」

「学校側は許すわよ、もちろん。だけどじめの標的にされたみた

いね

「そつか。だからトイレで黒く髪を染めて……。あれ？ でも染めれば大丈夫なような……」

「そうだと私も思つてたんだけどね。けれどその先はもう私も知らないのよ」

「それじゃあ、他に知つている先生はいないんですか？」

「そうね。流石に30年も勤め続けている先生なんて……」

「一人いるんじゃないかな？ 今はもう退職してるけど」

「そう言って話の輪に突然入りこんだのは先生の御主人だった。

「あなた。まだ寝てなかつたの？」
 「ああ。ちょっと話している内容が気になつてな」
 「その、さつとき言つてたのは……」
 「橙木先生だよ。一昨年退職した」
 「橙木先生。確かにその人なら知つてゐかもしれないわね。少なくとも30年はいたらしいから」
 「じゃあ、その先生に聞きにいけば……。」
 「多分話してくれるよ。家も近いしな、案内するよ、次行くとき」と
 「ありがとうございます」
 「あの、もしかして先生の御主人つて……」
 「おうつ、卒業生だよ。お前らの学校な」「やつぱり」
 「あれ？ でも先生の方が年上？」
 「失礼ね。これでもまだ34よ。まあ、私の方が年上なのは事実だけ」
 「実はな。俺が高校2年のときの担任でな。好きで告白したんだよ」「えー！ ジゃあ、先生と生徒で……」
 「バカね、してないわよ。始めは断つたの。でもそれからもしつこくされて、それでこうやって一緒に暮らしてあげているのよ」「それはちょっと……」
 「うそうそ。本当はな、卒業式のときに言つたらオッケーされて、それから付き合ひはじめて。いつもつて結婚もしたんだよ」「すごーい。いいな」「はあつ、もう」
 「なあ。今日しないか？ ちょっと俺、目が冴えちゃつて」「えつ、何言ってのよ。この子たちの前で」「いいじょんか、明日は休日だし。そつだ！ お前らもしなよ、部

屋俺らと別々にするから。ちゃんとゴムもあるしな

「しようがないわね。ごめんね。この空氣読まない、おバカさんの
せいで。もう話、終わりで

大丈夫よね

「はい！ ありがとひざいました」

「行きましょう」

「ゴムはその電話の置いてある棚の下開けたら入ってるから。自由
に使つていいぞ」

そう言つて二人は席を立ち、寝室に行つてしまつた。僕ら4人もほ
ぼ同時に席を立つと、敷かれていた布団を持ってそれぞれ別の部屋
に行き、せつかくなのでゴムを一つもらうとそれぞれ一人愛の時間
を過ごした。

27、一人目

私が黒い水を目撃してから早6日目の朝、いつもより少し遅い時間に登校すると、教室がざわざわしていて騒がしく妙な雰囲気だつた。気になつてともくんに話しかけてみる。

「ねえ、ともくん。おはよ！」

「おはよう、かな」

「どうしたの？ なんか騒がしいけど」

「昨日見たらしいんだよ、2組の柴浜さんがかなが見たのと同じ黒い水を」

「えっ！？」 それ、ホント？」

「ば、ばか。もっと小さな声で」

「めん」

「これはまずいことになつてきたな、早く真相を突き止めないと」

「橙木先生からはまだ話聞けないの？」

「いや、赤田君に確認したら明日には聞けるそつだ」

「そう。でも、柴浜さん、どこで目撲したんだうつね」

「それもそうだな。昼休みにでも聞きに行くか」

「うん」

どうやら黒い水を目撲したのは私だけではなかつたようだ。一人だけなら見間違いかかもしれないし、単なる幻を見ているだけに過ぎないのかもしれない。しかし一人ともなれば幻ではなく、事実だろう。これは何かこの話には裏がある、そう私に予感させた。

28、もう一つのケース

午前中の授業が終わって昼ご飯を済ませると、私は彼と一緒に柴田さんのいる2組の教室に向かう。確か名前は柴田宏子さん、彼女はバレー部に所属していて、部活同士の交流で一度か一度、話したのが記憶にあった。

「かなはさ、どう思う?」

廊下を歩いている途中、彼は私にそう聞いてきた。

「どうつて、何が?」

「君以外にも目撃者がいたってこと」

「えつ、分からぬけど」

本当は思っていたことがあつたけど、彼の率直な意見が知りたかった私はあえて自分の思っていたことを言わなかつた。

「そうか。これは僕の勘なだけだ、この話、何か裏がある気がするんだ?」

「裏?」

「そう、裏だ。この話、もしかなが唯一の目撃者だつたら、見たものは現実ではなく、全くの偽物、つまり幻を見ていた可能性も考えられる。しかし一人となると話は別だ。そんな同じ幻を別の時間に二人が見間違えるはずがない。となると考えられるケースは二つだ」

「二つ?」

「うん。一つは誰かが女子トイレに黒い水が出る仕掛けをして、それを偶然一人の女子生徒、つまりかなと柴浜さんが目撃したケース」

「もう一つ?」

そう私が聞き返すと、彼はとんでもないことを口にした。

29、あの「」と……

「分からぬいか？ 柴浜さんが黒い水の仕掛けをした犯人で、目撃したと嘘をついているケースだよ」

「それないよ、絶対。柴浜さん、悪そうな人じやないもん」

「まあ、これはあくまで可能性の話だよ」

「ならいいけど……」

確かに彼の言つたことは可能性としては正しい、ただ前に柴浜さんと話したことがあった私はそんなことは有り得ないと確信していた。

2年2組の教室の前に着くと、彼女のことを探っている私が中に入つて呼びに行く。彼女の席は教室の窓際、奥の端つこの方で机にノートを広げて勉強しているようだ。

「柴浜さん」

すぐそばに近寄つた私は彼女の名前を呼ぶ。

「あっ、白井さん、よね？」

「うん。今ちょっといいかな？」

「もしかしてあのことを聞きに来たの？」

「まあ」

「いいけど、何かあるの？」

そう言われて私は彼女の耳元に口を近づけて、こいつやつこいつ言つた。

「実は私も見ちゃつたんだ。だから今、調べて」

「そう。分かつた」

彼女は私の話を聞くと納得してくれて、机の上のノートを片付けて席を立ち、一人は教室を出て彼と廊下で3人一緒になる。

「僕、青山知輝。よろしくな」

「うん。私、柴浜宏子ね。よろしく」

「ここじゃ話しつくいよな」

「うん」

「じゃあ、どうか人のいないところでも行こうか」

「ありがとう」

「うん」

こうして集まつた3人は彼の案内で外に出て、誰もいない校舎の裏に向かつた。

30、不思議なこと

彼女が壁を背にして立つて、私たち一人はその正面に立つて目を見つめる。最初に口を開いたのは彼ではなく、意外にも彼女のほうだった。

「私、話してもいいけど、その前に聞いておきたいことがあるの」

「ん？」

「さつき白井さん、自分も見たつて言つてたよね」

「うん」

「それホント？」

「ホントだよ。先週の木曜日の昼に、南校舎4階の女子トイレで」

「そつか。私が見たのは昨日の夜、場所は同じだったわ」

「同じか」

「それで、柴浜さんはどの個室に入ったの？ 私は手前から2番田だけだけど」

「あつ、それは違う。私は一番手前の」

「なるほど。続けて」

「トイレを済ませて水を流した。そしたら途中まで透明だった水がいきなり黒く染まって、底に溜まつたの」

「蛇口の水は？」

「黒い水が出てきた」

「全く同じだな、かなが見たのと」

「うん」

「でも一つだけ不思議なことがあるのよね」

「何だ？」

すると彼女は「ひひひ驚くべきことを口にした」

3-1、仕組まれた」と

「実は私、この話、誰にもしてないんだよね」「えっ！？」

「それ？　どういうことだ？」

「私が昨日の夜、トイレで黒い水を目撃したことは事実。それは確かになんだけど、まだ誰にも言ってなかつたのよ。それなのに今日朝学校に来たらクラスのみんなが知つてて」

「ホントか？　それ」

「うん。だつて、噂の怪談話にもあつたでしょ。みんなに知れ渡つて、それで彼女は酷いいじめにあつて自殺に追い込まれたつて。それを思つたら誰かに言えるはずないもん」

「なるほど。それもそうか」

「ねえ、どういうことだと思つ？」

「それなら可能性は一つだ」

「えつ、分かるの？　ともくん

「もちろん」

「じゃあ、教えて」

「誰かが仕組んだよ、その女子トイレで黒い水が出るよつ」。それでみんなに柴浜さんが目撃したつていう噂を流したんだ」

「ちょっと待つて！　どうして私は……」

「かな、それは今から説明する。多分犯人の狙いは柴浜さんに黒い水を目撃させることだつたんだ。だけど最初に仕掛けをした先週の木曜日、かなが見てしまつた。そのとき犯人は相当焦つたはずだ、なにしろかなが目撃したことみんなに話してしまつたら、誰も夜の校舎でトイレになんて行かなくなるだろうからね。そうなると計画が台無しになる。だけど幸いなことにかなは僕にしかそのこと話さなかつた。それでみんなに広まつていなかつたことを確認できた犯人は、もう一度同じ仕掛けをして、本来の対象である柴浜さんに黒

い水を叩きさせたんだ

「そつか」

彼女が告げた驚くべきことから導き出された彼の推理、黒い水の怪談話は今日最初の山場を迎えた。

32、心当たり

「ねえ、柴浜さんは何か心当たりってないの？」
「心当たりって、私が恨まれる？」
「うん」
「ないよ。だつて私いじめとかしたことないし、彼氏とかもいたことないから」
「そうか……」
「あつ、でもそういういえば関係ないとは思うけど、私のお母さん、この学校の出身だよ」
「へえー、そうなんだ」
「じゃあ、卒業したのっていつ？」
「えっとね……、今、…………だから、30年近く前になるんじゃないかな」
「30年か。となると何か知っているかもしれないなあ」
「えつ、どうこうこと？」
「あれ？ 知らないのか？ 黒い水の怪談話の噂」
「知ってるよ。さつき話したでしょ」
「いや、それじやなくて。基になつたのは30年前に起きた話なんだよ」
「そうだつたの！ ねえ、詳しく聞かせて」
「ここで僕ら二人は彼女に基になつた30年前の話を彼女に説明した。じゃあ、つまり私が今回見た黒い水もそこからきてるってこと？」
「そう」
「分かった。私、お母さんに聞いてみるよ、30年前のこと」
「ありがとな。今度聞いたことを教えてくれよ」
「うん。それじゃあ、私そろそろ行くね」
「ありがとう、柴浜さん」
「いらっしゃれ。私も聞いてもらえてちょっと安心した。またね」

「うん」「

振り返つて私たちに手を振り、彼女は元気に駆けて行つた。

「よかつたな。元気になつたみたいで」

「うん。私たちも戻ろう

「だな

そう言って一人も彼女の後を追つようと教室に戻つて行つた。

33、増えた謎

赤田君の話によると30年前に学校に勤務していたという橙木先生からは土曜日の昼に話を聞けるようだ。今日は金曜日、先週の木曜日に黒い水をトイレで目撃してから1週間以上になる。昨日すでにもう一人の目撃者になった柴浜さんからも話は聞けた。そのため特にすることもなかつた私は、昼休みにご飯を食べ終わった後席に座つたまま、これまでに起きたことを含めて事件全体について考えてみた。

始まりは先週の木曜日に私が誤つて黒い水を目撲してしまったこと、全ての謎がここにつながつてゐる、そんな気がした。昨日の柴浜さんの話を聞く限り犯人の本当の狙いは彼女だったのだから。ただそれでも1つ不思議なのは彼女が目撲してから2日も経つているとうに噂が広まつてゐるだけで、いじめが起こらないことだ。少し不謹慎なことを言えば私自身も彼女が本来のターゲットだと分かつて怯える必要がなくなり、内心かなりほつとしていた。

しかしそれはあくまで昨日の彼女の話を素直に信じるのならばだ。そう思つてみると昨日のことでもう一つ疑問がある。これは話の内容とはほとんど関係ないのだが、彼女は私たちに話しただけで不安に思うことがなくなつていないにもかかわらず、最後に離れていくとき、笑顔を見せて予想以上に元気になつていたということだった。とすると決して彼女を疑つてゐるわけではないが、話をそのまま信じて鵜呑みにするのにも問題があるのかも知れない。

大体根本的なところを見つめ直してみると、まず犯人の意図がはつきりしない。彼女に恨みがあるならこんな回りくどいことなんてしないで、ストレートに何かをしたほうがいい気がする。それに彼女

が黒い水を叩きした話を犯人自身が広めるとなると、あとでいじめが起きたときに返つて疑われる危険性があるのでないだろうか？

そう考えると誰が仕組んだというのは私たちの勝手な思い込みで、実は本当に起きてしまった怪奇現象だと可能性も十分になる。結論はどうちらにせよまだ謎を解くには手がかりがそろっていないようだ。そして明日の土曜日に橙木先生からどんな話が聞けるのか、その30年前に起きた出来事が全ての答えになっている、私にはそう思えた。

34、30年前の「ヒト」

6月11日の土曜日の昼の午後1時過ぎ、私たちは今日話を聞くことになっている榎木先生の家の前にいた。昨日の昼間ともくんが緑川先生から受け取った地図を頼りにここに辿り着いた4人、目の前にある家は少し古い感じはしたがごく普通の一軒家だった。

「ここか。意外と普通だな」

「そうだな」

「そうね」

「うん」

「鳴らしていいんだよな？ インターホン」

「待つた。僕が鳴らすよ、事前に電話で話してるから」

「そうか。じゃあ、頼むよ」

彼はインター ホンの前に移動すると、一呼吸置いて1回ボタンを押す。すると“ピンポーン”と高い音が鳴り響き5秒後くらいに女性の声が聞こえてくる。

「はーい、どちらさま？」

「先ほど電話させてもらいました青山です」

「どうぞ、門は開いてるから入つて」

「はい、ありがとうございます」

彼がそう応対すると門を開けて中に入り、同時に玄関から奥さんと思われる人が顔を出した。

「いらっしゃーい。さあ、入つて」

「おじやまします」

「どうぞ、いらっしゃへ」

みんなでお辞儀して中に入り、靴を脱いで廊下を歩いてリビングから、『主人が座っている奥の和室に案内される。

「おじやまします、こんにちは！」

「こんにちは。さあ、そつちに楽にして座つてくれ」

「ありがとう」「ありがとうございます」

「おい、母さん。お茶と何かお菓子を」

「はい」

「すみません」

「ありがとうございます」

4人全員座ると一分ほどしてすでに用意あつたのだろう、お茶とお

菓子が運ばれてくる。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

橙木さん夫婦は一人も60代半ばくらいで、優しそうな雰囲氣でとても好感が持てる感じがした。

夫婦一人の印象が思っていたより優しさだったので、重い空気ではなかつたものの、流石に彼二人は緊張していて、話を切り出そくかどうか迷つてゐるよう見える。すると見かねたえりちゃんが口を開いた。

「あのう？ すみません。今日はお話を……」

「そうだつたな。確か30年前にあつた黒い水の怪談話についてか？」

「あっ、はい。それです」

こういふと周りに氣圧されることなく積極的な彼女は本当に頼りになる。

「それじゃあ、始めるか。その前に、例の黒い水を見たといふのは？」

「はい、私は？」

私が返事をしてそう答える。

「君か。一つ言つておこひ。まず、安心しなさい、それは単なる誰かのいたずらだよ」

「えつ？」

「10年前に一人の女子生徒が自殺した件、緑川先生から聞いたな」

「はい」

「実はな、あの話には緑川先生も知らない続きがあるんだ」

「続きが……ですか？」

「ああ。その女子生徒が自殺してから2カ月後、私のところに一人の女子生徒が来てな。言つたんだ、『私、見ました』って」

「それって、まさか……」

「そのまさかだ。なんと目撃したと、夜の校舎の女子トイレで2、3人の生徒がこもつて怪しい行動をしているのをな」

「じゃあ、犯人は……」

「それが未だに分かつていいんだ」

「でも怪しくないですか？ その女子生徒も」

「確かに。すぐに教えてくれれば犯人も分かつたかも知れないが、

2カ月後にはすっかり事は収まっていたからな」

「どうしてすぐに言つてくれなかつたんだろう」

「いじめに巻き込まれるのが怖かつたと言つてたよ。まあ、今となつてはどうしようない話だな」

「そうですね」

最初に橙木先生から語られたこと、私はいたずらだという確信が強まつたことに少し安心したけど、今回は本当に犯人が見つかるのか頭に重い不安がよぎつた。

「一ついいですか？」

「なんだ？」

「どうして緑川先生に教えたんですか？」

えりちゃんが聞いたことは尤もな疑問である。なぜ、当事者の一人である先生に教えたんだろうか。

「それは他の先生から止められたんだ。私は教えておいたほうがいいと思つたんだが」

「やっぱりそれって、緑川先生がショックを受けて田撲者に何かしかねないと……」

「そうなんだ」

「酷い。緑川先生、すごく優しくしていい先生なのに」

「ああ。私はもちろん先生を信頼していた。でも申し訳ないことだが、学校側の圧力には屈せざる得なかつたよ。すまないな」

「いえ、先生は悪くないですよ」

「ありがとう」

「あの？ 先生それよりもそろそろ本題の……」

「あつ、そうだつたな。では本題に入るとしよう。もうあれから30年になるのか、それは私が水原高校に赴任して3年目の時だつた。彼女の名前は黒髪優希と言つてね、髪が薄い茶色の女の子だつたよ」

「黒髪！？」

「えつ！？」

「うそつ！？」

「驚くのは分かる。まあ、ちょっと考えれば想像はつくな。彼女がいじめに遭つた理由、それはまさに名前と髪の色のアンバランスさにあつた。ただ彼女が高校1年の時は靴が隠されたり、時々悪口を言われたり、カバンに落書きがされていたりする程度だつた。でも彼女が高校2年になると段々エスカレートしていき、机にカッター

ナイフの刃で“死ね”と傷つけられたり、訳もなく髪に因縁をつけて引っぱりまわしたり、しまいには殴る蹴るの暴行が陰でされるようになつた

「担任の先生は対応しなかつたんですか?」

「しなかつた。特に2年の時の担任は保身しか考えない最悪な男でな、私もいじめの事実を知ったのは2年生の11月頃、彼女が帰り道で集団暴行に遭っているのを見かけたときだつたよ

橙木先生が話し始めた30年前の出来事、それはちょっと意外なものだった。

「私は倒れ込んでいる彼女の前に仁王立ちなつて叫んだ、“やめろ！！”とな。そうすると6～7人いた男女は一目散に逃げ去つて行った。辺りはもうすっかり真つ暗で誰だかは全く確認できなかつたよ」

「それで彼女は？」

「顔は傷だらけで出血があり、あざもかなり酷かつた。ただ幸いなことに身体の方はそこまで酷くなくて、私が支えて上げれば立つて歩くことはできた。だから家まで送つてあげたよ。その後担任の先生が対処しない以上、相談には私が全部乗つてあげた。それで最後はその子の両親とも相談して、別の私立高校に移るようにしてもらつたんだ」

「えっ！？ 待つてください。じゃあ、彼女は……」

「そうだ。実は自殺なんていないだ。その先の進路は知らないけれど、きっと彼女は今もどこかで元気に生きているはずだよ」

「そんな。なら、ホラーでも何でもないはずじゃないですか！」

「そう。本当はそうなるはずだったんだ。しかし私は一つ大きなミスを犯した」

「ミスですか？」

「秘密裏に進めてしまつたんだ、彼女の転校をね。そのときはかなり酷いいじめがあつたし、表立つてするといろいろ妨害があつたりして、スムーズにいかなくなるんじゃないかと思つてね。でもそれが大きな間違いだつた。実際は彼女が学校に来なくなる同時にどこかで自殺したんじゃないかという話が広まつてね、気付いたときは事実を明らかにするタイミングを失い、結局生徒たちの間では彼女は自殺したことになつてしまつたんだ」

「そうだったん。じゃあ、黒い水との関係は？」

「彼女は元々髪の毛の色にコンプレックスがあつた、だけど始めは

校則で禁止されていたため毛染めはしてなかつた。しかしいじめに耐えかねなくなってきた高校2年生のときから、親にこつそり隠れてトイレで髪を黒く染めるようになった。すると彼女が髪を染めた後のトイレには当然黒い水が溜まる、それが後に自殺の話と一緒に広まつて今のようなになつたんだ」

元々は間違つた事実から作られたもの、それが黒い水の怪談話の真相だつた。ただそれが未だに語り継がれていて実際に一人が自殺しているとなると当然間違いでは到底済まされない。だからこそ今回はこの悪夢を断ち切れなければならない、私は強くそう感じた。

橙木先生が話してくれた30年前の黒い水の「怪談話」につながるエピソード。それは元々ホラーでも何でもなかつたのに、生徒が勘違いをしたことによって広まつて生まれた、心無く酷い代物だった。

しかしそれが実際に10年前現実となり、一人の女子生徒を死へと追いやつたのだ。そう思つと今回の話も单なる誰かのいたずらで終わりというわけではなく、しっかりと真相を究明して事実関係を明らかにし、犯人には罰を与える必要がある。

4人は先生の家からの帰り、これからどのようにして真相を明らかにしていくのかを話し合つた。

「この話、元は怪談でも何でもなかつたんだな」

「そうね。30年前、本当は誰も亡くなつてなかつたみたいだし」

「そうなると、今回の件もますます誰かが仕組んだものである可能性が高くなつたな」

「そうだな。となると、もう一度トイレを調べ直した方がいいな」

「えーっ、また調べるの？」

「それはそうだろ。今回は誰かが仕組んだものだつて明らかになつ

ているし、それに前回何か見落としていたかもしれないからな」

「そうそう。それに念入りに調べればきっと犯人が残した痕跡がどこかにあるはずよ」

「その通りだな。じゃあ、いつにする？」

「早い方がいいだろ。明日の昼間はどうだ？」

「昼間？　いいの？　昼間で？」

「問題ないだろ。もつ怪談話じゃないつて分かつたんだし。むしろ昼間の方が明るいからいろいろ見落とさずに済むだろ」

「そうね、私も賛成。かなは？」

「いいよ。昼間ならそんなに怖くないし、明日は空いてるから
「よし、決まりだな。集合時間は明日学校の正門に昼の1時でどう
だ？」

「オッケー！」

「うん」

「分かった」

こうして4人は明日学校で、先週調べたトイレをもう一度調べ直す
ことになった。

39、トイレの秘密1

トイレの流れる黒い水、私たちが前回調べたときはその謎を明らかにすることはできなかつた。ただこれまで調査や出来事を基にいくつかの推測を立てることはできる。一つに私が見た黒い水は別に柴浜さんも目撃している以上、決して幻などではないということ。二つにその彼女と昨日澄木先生の聞いた話から察するに、呪いのような説明のつかない怪奇現象などではなく、誰かが仕掛けた悪質ないたずらである可能性が高いということ。

となると今回こそはトイレにどんな細工が為されたかを明らかにする必要がある。そしてはここと一緒にいるみんなも同じ決意だと思う。

しかしこのときまだ4人は気付いていなかつた、黒い水には知つてはいけない秘密が眠つているということを。

4人の所属している部活は土曜日の昼の2時過ぎから夜の8時まで練習があるが、日曜日は休みで練習がない。逆に日曜日に練習がある部活もあつて、平日と同様に夜の8時まで校舎内に入ることができるようになつていた。

待ち合わせをしていた4人は1時に正門前に集まり、先週の木曜日のときと同じように南校舎4階のトイレの扉を開いた。ちなみに昼間とはいえ休日に勉強しにくる生徒はほとんどなく、念のため先ほど4階の教室を覗いてものの誰もいなかつた。つまり彼も一緒に安心してトイレの中を調べることができる。

40、トイレの秘密2

トイレには他の3人が最初に中に入つて、私があとから一步遅れて入る。そのときだつた、私は入る直前自分でも理由は分からぬけど、なぜか後ろを振り向いた。何か気になつたのかそのまま左右

を向いて廊下を確認する。

「どうしたの？ かな」

「誰かいるのか？」

「うんうん。だけど……、いいか」

「いいなら、調べるぞ！」

「うん」

このとき私には若干寒気が走ったけど、それがはつきりとしたものではなかつたし、見る限り廊下には誰もいなかつたので、その感覚を無視してしまつた。

ただ4人のうち誰も気付かなかつたそのことこそ、この怪談話の本当の真相につながる最も重要なことだつた。そう実はこのとき廊下に人はいたのだ、それも一人や一人ではなく何人も、そして今から4人が見つけ出してしまう事実、それは絶対に知られてはいけないもの。遂に運命の歯車は急速に回り始めた。

40、トイレの秘密2

トイレに入った4人、先頭にいたかずき君が最初にドアを開いたのは一番手前側だった。そのとき私は少し不思議に思った、なぜなら自分が先週黒い水を目撃したのは手前から2番目のトイレだったからだ。

「えっ？ あれ？」

「どうした？ かな？」

振り返つてともくんが聞いてくる。

「いや、なんでこっちのトイレなのかなって？」

「分からぬの？ かな」

「だつて私が見たのはその隣だし」

「そうね。でもさ、柴浜さんが見たのはこっちよ」

「あつ、そつか」

気付くと簡単な話である。私は確かに手前から2番目のトイレで見ただけど、今週柴浜さんが目撲したのはこっちの一一番手前側、となると前に調べていないので何か痕跡が残っている可能性が高いと予想できた。

「さてと、じゃあ、開けるか」

そう言って彼がトイレのタンクのふたを開けようとしたそのとき、ほぼ同時にトイレの入り口の扉が開いた。

4-1、トイレの秘密③

「やめてもらいましょうか。あなたたち、そう言って入ってきたのはなんと柴浜さん、それも一人ではなく男女合わせて6人、しかも感じだとさらに外の廊下に3、4人はいるようだ。

「どういうことだ？」

「やはりうかつだったみたいね、あなたたちに話したのは」「えつ、じゃあ、もしかして……」

「そうよ。このトイレで黒い水が出るようになったのは私、そしてここにいるみんなが協力者なの」

「そんな……」

あまりに驚愕の真実、私はすっかり動搖して言葉を失った。

「でも目的は何なんだ？ どうしてこんなことを？」

「さあね、勝手に考えなさい。ただし、地獄でね」

「地獄って……、おい！ まさか！」

「そう、そのまさかね。あなたたちみんなこれからあの世行きよ。さあ、連れて行きなさい！」

「ちょっと待て！ おい！」

「待つてよ！」

私たちも抵抗したものの、流石に数の暴力にはかなわず、4人とも捕まってしまった。

42、トイレの秘密4

その後4人が連れて行かれた場所、それは休日の昼間でも全く人の5階の真上の屋上だつた。そこにはさらに少なくとも10人はいたどうか、合わせて20人ほどの集まりに4人はほとんど抵抗できなまま、両手両足をロープで縛られて、目隠しとガムテープで口をふさがれてしまう。

「どうします？ リーダー」

20人ちょっとが輪になつて囲まれた中心にそのまま投げ出される4人、うち真ん中にいた男子一人が柴浜さんに質問する。

「そうね。このまま死んでもらいましょうかね」

「分かりました」

あつさり彼女の提案を聞き入れると、彼女以外全員が4人のもとに近づいてくる。私は必死に抵抗してもがき、口をもごもごさせて話させてと訴えかける。

「ん？ 何か言いたそうね」

「聞いてみます？」

「じゃあ、白井さんだけ剥がして。それとみんなは一度下がつて」「分かりました」

そうすると20人は元の位置に戻り、私だけがガムテープを剥がされて話ができるようになった。

43、黒い水の真相1

私は今さら助かるとはもう思つてなく、実質諦め半分の状態に近い。となると“この縄、解いてよ！”なんて言葉は不毛だと考えていた。その上でたまたま貰えた話を聞くチャンス、そんなときには質問することと言えばこれしかなかつた。

「ねえ、柴浜さん、どうしてこんなことを？」

「そうね。ホントは話さないつもりだったけど教えて上げるわ。実はね、私たちみんな生きてないの」

「えっ？」

全くもつて意味が分からなかつた。生きていない、つまりそのままとればここにいるのは幽霊ということなのだろうか。しかし当たり前のことだがこの世に幽霊なんて存在するはずがない、そう思つと私が今見ているのはいつたい……。

「訳が分からないつて、顔してるわね。でも悩む必要なんてないの、私たちがここにこうして存在できている以上、それは紛れもない事実なんだから。それにね、あなたもよく知つているはずよ、私のことは。散々調べてたみたいだから」

私も散々調べていてよく知つているはずの幽霊つて……。

「ま、まさか」

「そう、そのまさかよ。私は30年前にこの高校にいた黒髪さんの幽霊なんだから」

「ちょっと待つて、黒髪さんは無事に他の高校に転校したって」

「確かにその通りね。だけどその転校先が最悪だつた。私は再びはじめを受けたわ、以前よりも数段酷い。それでもなんとか耐えきつて卒業した、でも案の定勉強はできてなくていい大学にも行けず、そして就職活動にも失敗してね。最後は路頭に迷つて交通事故に遭つて死んだの。本当に最低の人生だつた。それもこれも全てこの高校を追い出されたせい、だからこうやって私は恨みを晴らしてるの」

彼女の口から告げられた衝撃の事実、それは柴浜さんが黒髪さんの幽霊とこいつとでも信じがたいものだった。

44、黒い水の真相2

となると私がトイレで目撃した黒い水も、彼女によつて見せられた全ての幻ということになるのだろうか。

「じゃあ、ちょっと待つて。私が見た黒い水も……」

「それは違うわ。あなたが見た水は本当に黒かつたはず、けして幻なんかではないの」

「どういうこと?」

「トイレのタンクの死角になる部分にね、仕掛けがしてあったの。レバーを回すと墨汁が流れ出て水が黒く染まる。流石に幽霊でも幻を見させることはできないからね」

「そうだったの。でも、蛇口の水は?」

「それこそ幻よ。多分残像が目に残っていたのよ」

「そつか……」

そう言われて私はあつさり納得してしまつた。というのも彼女が幽霊だと判明した今、私以外が黒い水を目撲してている可能性はなくなつたからだ。

「そうだわ。最後に1つ教えてあげる、なんで私があなたを対象に選んだか。分かる?」

「分からぬけど……」

「それじゃあ、冥土の土産に教えてあげる。実は……」

そうして彼女の口から告げられた本当の真実、それはとても信じ難く受け入れられないようなものだつた。

45、黒い水の真相 3

「あなたのお父さんが私にいじめをした首謀者だったからよ」

「そんな！ うそよ！」

「そうね、正確に言えば今は「うそね」

「今はうそ？ ……まさか」

「そう、そのまさかよ」

私の母親は一度再婚していて、今の父親とは血はつながっていない。前に聞いたことがあつたけど、一度目の結婚は親の勧めで半ば強制的にさせられたらしく、あまり性格のいい人ではなかつたようだ。しかし、まさかその人こそが彼女をいじめた張本人だったとは夢にも思わなかつた。

「でも私をいじめて何になるの？」

「生まれ変われるのよ。そしてもう一度人生を歩めるの。今の私は靈としてさまよつて柴浜さんに乗り移つた仮の姿。あなたをもし死に追い込むことができれば、新たに生き直すことができるって訳」

「それならせめて死ぬのは私だけで……」

「ダメよ！ 事実を知られたからには4人とも死んでもらうわ。さあ、そろそろ話は終わりにしましょう。みんな！ 最後の仕上げに取り掛かりなさい」

「ま、待つて…」

「問答無用よ！」

「はい！ 分かりました」

そう機械的な受け答えと同時に、再び全員が私たち4人のもとに近づいてきた。

46、全てが終わるとき（最終話）

近づいてきた彼らが制服の内に隠していたもの、それは刃渡り7?ほどのサバイバルナイフだった。それを手に持ったのは4人で、後は最後の抵抗でもがく私たちを抑え込む役割のようだ。後ろから一人に対して4人がかり両肩、両腕、両足を抑え込まれて、胸にナイフを突きつけられる。ここで余つたのが話していた柴浜さん彼女一人、やつと私は人数を今さらながら把握できた。

彼女は私たちの周りをゆっくりと歩いて、一人一人の様子を確認する。そして私の前に立った彼女、最後の話を始めた。

「幽霊には特別な力がある。靈はこの世界の空間をさまよつて個人の身体に乗り移り、自由に操ることができるのである。そして私は人の心中に問い合わせて、全て思い通りに動かすことができる。だからここにいるみんなもけして自分の意志ではない、私に命令されて動いているに過ぎない。それだけがせめてもの救いかもね。あなたたちを恨んでいるのは私だけ、それを最後に覚えておきなさい。じゃあ、始めて！　みんな」

それが最後の彼女の言葉だつた。私たちは一切の抵抗を許されず、心臓にナイフを突き立てられ、血が勢いよく吹き出したのが見えたかと思うと、感覚が無くなり意識が薄れていき、あつという間に地獄へ突き落とされた。

47、忘れ去られて……（後日談）

4人の生徒が一人の少女の幽霊によつて命を落として10年後、あの一瞬にして血の海になつた屋上は改修工事によつて跡形もなくなつた。始めはあまりの複雑怪奇な殺人事件だつたため、マスコミの過剰報道によつて世間は大いに騒いだ。しかし警察の捜査が進んでも一向に真相が明らかにならず、謎は深まつていくばかり。結局連日繰り返される同じような無限ループともいえる報道に飽き飽きされて事件は徐々に忘れ去られていった。

突然の出来事、悲劇に悲しみを覚えた生徒や先生も今は学校におらず、幽霊も唐に消えて怪談話も忘れ去られてしまった。

ただ、一つだけなぜか守られていることがあつた、南校舎4階の女子トイレの手前から2番目、そこは今でも誰一人使わづいつもきれいなままだといつ。

～END～

48、あとがき（最終回）

いろいろ迷走した内容の小説でしたが、ある程度長い話になつたのであとがきを書きますね。元々実はホラー 자체去年から「夏ホラ－2010」に合わせて考えていたのですが、結局思いつかず書く機会がありませんでした。

しかし今回はぜひとも書きたいと考え、学園物ホラー以外に事件物などと迷った挙句、最終的に前者に落ち着きました。ただ内容的には本当に大失敗ですね。これだけ要領得ない展開になつたのは、今回が初めてだと思います。途中で何度も中断しようと思つたのですが、せつかく書いたのにもつたといないと思い直し、なんとか完結させることができました。

正直理想を言えばこんな雑なバッドエンドではなく、全て謎が解決してハッピーエンドにしようと思つていました。しかし現実はそういった手の込んだ中身が浮かばず、主要登場人物全員死に追い込むという、残虐の極みみたいなエンドになつてしましました。まあ、ホラーなので返つてこっちのほうがよかつたかなとは思わなくもないですが……。

ただ一つ勉強になりました、僕には絶対にホラーは書けないと。初期に書いたファンタジーと、1年近く前のミステリーも挫折してしまい、結果的に自分は恋愛物しか書けないと思います。

ということでこれからは完全に恋愛小説メインで行きたいと思います。

あまり書くこともないのでこれで終わりにしますね。

最後までお付き合いいただき本当にありがとうございました。そしてどうかこれからもレンタンを、みなさん、どうかよろしくお願ひします。

記録集（最終回投稿時現在）

合計PVアクセス数 4562

合計ユニークアクセス数 988

1日の最高PVアクセス数 152(11.08.13)

1日の最高ユニークアクセス数 61(11.08.13)

月間最高PVアクセス数 1209(11.10)

月間最高ユニークアクセス数 312(11.08)

以上です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7349v/>

恐怖の黒い水

2011年12月31日17時04分発行